



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Nisän Saman i Bithe における満州語詩の分析
Author(s)	津曲, 敏郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 28(1), 61-104
Issue Date	1980-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33438
Type	departmental bulletin paper
File Information	28-45_PL61-104.pdf



Nišan Saman i Bithe における満州語詩の分析

津 曲 敏 郎

An Analysis of the Manchu Poems in
Nišan Saman i Bithe

Toshiro TSUMAGARI

Nišan Saman i Bithe における満州語詩の分析

津 曲 敏 郎

はじめに

I 資 料

1. 地の文との区別
2. 地の文の韻文的性格
3. 詩の原文
4. 詩一覧

II 分 析

1. 折返し句
2. 行
3. 節
4. 頭 韻
5. 平行的表现
6. 比喩・反語法
7. 特異な語形・語順・表記法

おわりに

は じ め に

満州語の豊富な文献資料の中にあって、*Nišan saman i bithe* 《Nišan シャーマンの書》はいろいろな点で特異な資料的価値を有していると言えることができる。一般に満州語の文献は歴史・政治上の記録や文法書・辞書など実用的な方面のものが多数を占め、文学の領域は翻訳ものを除けばまれである。その点で本書は翻訳によらず本来満州語で書かれた文学上の一ジャンルを示す数少ない一例として貴重であるのみならず、内容的にもシャーマニズムに関する民間伝承物語の記録として、文化人類学的研究の資料ともなり得るものと思われる。また言語学的見地からは、満州語文語には通常見られない特異な語形が数多く現われる点で、一種の口語的資料としての価値をもつ。さらにまた本資料中には詩の形式をそなえた部分がかなり豊富に存在し、これは他の満州語資料にはま

れにしか見ることでできないきわめて重要な特色である¹⁾。

Волкова²⁾によれば本資料は三種の手稿本の形で存在し、現在 Институт Народов Азии に保管されている。これらはいずれも А. В. Гребенщиков が1908年から1913年にかけて、それぞれチチハル、アイグン、ウラジオストクで入手したものである。前二者の手稿本は未刊行で、今日その利用は困難であるが、1913年ウラジオストクで満州人 Dekdenge によって書かれた手稿本については、Волкова の影印を通して知ることができる。それによると本文は92頁にわたり、一頁あたり10行（1—69頁）ないし11行（70—92頁）の草書体の満州字で書かれている³⁾。

その内容は当時の満州族、ソロン族、ダグール族等の間に口承で伝えられた物語を記録したものであり、上述の三種の手稿本のうちではウラジオストク本が最も完全に物語の全貌を伝えているとされている。物語は、満州人の員外 Baldu Bayan の一人息子 Sergudai Fiyanggo が十五歳で狩に出て急死することに始まり、若い未亡人のジャーモン Nišan の活躍によって命を取り戻すまでの様子が詩編を交えながら刻明に叙述されている。

本資料については Волкова による紹介以後、その影印をもとに新たな転写 (transliteration) ・翻訳・注解の作業が今日までに数種刊行されている⁴⁾。それらにより、物語の内容が明らかにされると共に、特異な語句等についてもかなりの程度に解明がすすめられ、さらに内容の文化人類学的解釈の試みもなされてきている。しかしながら本資料の重要な特色をなす詩については、従来特別の注意が向けられず、その韻律的分析等の試みはほとんどなされていない。訳注の作業の中でまれに韻律の問題に触れたものはあるが、それも特に特異語の解釈に際してのきわめて断片的な指摘にとどまっているのが実状である。筆者の目にとまった範囲では、わずかに Sinor⁵⁾ が本資料中の詩の存在に注目していくつかの詩編を引用・紹介しているが、それも具体的な分析は少ないうえ、直接原資料によらず V の転写と解釈によったためと見られる誤りを

含んでいる。

本稿では、まず原資料から詩の部分すべてを取り出して新たに転写・翻訳して掲げ、次にその資料に立った上で観察される韻律上および修辭上の諸問題について分析と考察を試みた。

I. 資 料

1. 地の文との区別

本資料では、一貫して展開する物語の随所に詩が折込まれているが、詩の部分と散文の部分（地の文）とは書写の体裁の上で明瞭に区分されているわけではない。両者を区分する重要な基準は折返し句（refrain）の存在である。本稿では事実上、折返し句を伴っている部分を詩とみなし、それ以外の部分を地の文とみなした。本資料に関する限りこの措置は大過ないものと思われる。

実際には原資料において詩の開始の部分から改行して書かれている場合が多いが、全く改行のない場合（以下に示す詩の番号で〈1〉〈2〉〈7〉〈8〉）、詩の開始後の最初の折返し句で改行される場合（〈4〉〈13〉〈14〉）および詩の開始の少し前で改行される場合（〈11〉）などがあり⁶⁾、必ずしも正確に詩の開始に対応するものではない。また改行のある場合にはその行の頭に、改行のない場合も詩の開始される行の頭に、△印が原資料に付されているが、〈7〉の詩にはなく、〈17〉には詩の途中にもある⁷⁾。ただしこれらの△印はすべて、のちの書込みによるものである可能性もある。いずれにせよ改行・△印とも詩の開始部を大まかに示してはいるが、詩の終わりを示す書写上の配慮は特にない。

本資料における詩（と本稿で呼んだもの）は、実際にはすべて物語中の登場人物（大部分は Nišan Saman）による独白・呼びかけ・報告等の形をとっており、物語の作者による三人称的叙述はすべて地の文でな

されている。したがって詩を前後の地の文から区分することは文脈上も比較的容易である。

2. 地の文の韻文的性格

ただし本資料において、地の文にもときおり韻文的性格が観察されることは注意すべきである。その顕著な例を〈6〉の詩の直前、シャーマンが祈りを始めるいでたちを叙した地の文の中に見出すことができる：

uyun cecike yekse be ujude hukšefi šunggayan beye sunggeljere fodoho i gese. …… amba jilgan i acingiyame. den jilgan i dekenime. haihūnga mudan hayaljame narhūn jilgan nadame

(36) 《九羽の小鳥の帽子を頭にかぶり、すらりとした身の揺れる柳のように、……大きな声でふるわせ、高い声で高め、柔い調子くねらせ、細い声で請い》

ここでは頭韻と、後半の2語+1語からなる平行的な構成が明瞭である⁸⁾。頭韻と平行的構成の顕著な地の文として、他に次のような例がある：

oncohon tuheci obinggi tucime. umušhun tuheci silenggi eyeme. oforo niyaki be oton de waliyame. yasai muke be yala bira de eyebume (17—18) 《おおむけに倒れれば泡出て、うつむけに倒れれば唾流れて、鼻汁を盆に棄て、涙をまさに川に流して》

hocohūn jilgan hobage be hūlame den jilgan deyangku be deginjime (27)

《良い声で hobage を叫び、高い声で deyangku を〔語義不明〕》⁹⁾

edun i adali efime yabume su i adali sujume yabume (66)

《風のように戯れて行き、旋風のように駆けて行き》

このような例は多いとは言えないが、本書が本来口承で伝えられていたものである以上、地の文の中にもかかる韻文的性格が見られるのはむしろあり得べきところであると言えよう。いずれにせよさらに検討を要する問題であるが、本稿では考察の対象を詩の部分に限り、地の文につい

ては以上の指摘にとどめる。

3. 詩 の 原 文

以下に本資料における詩の全部を、Möllendorff 式ローマ字転写に逐語訳を添えて掲げる。行の区分は原資料では、なされていないが、後述の基準により行分けし、便宜上各行に番号を付す。原資料の句読点(cik)は、で示す。()内の数字は原資料の頁数である。

各詩の後には演唱者や場面、詩の形式・内容等について簡単な説明を加えた。特異な語の解釈等については特にS, Dを参照した点が多いが、原則としてそれらによらない場合のみ注記するにとどめた。また転写については特にDに言及したところが多いが、これはDの作業が他よりも新しく、また利用されやすいと思われる点を考慮したためである。

訳においては適宜句読点を補ったが、特に句点をうった個所はおおむね節(後述Ⅱ3参照)の切れ目に対応している。訳では折返し句は省略した。

<1> (15—16)

- | | |
|---------------------------|-------------------|
| 1 ama i age ara. | 父の皇子 |
| 2 susai sede ara. | 五十歳で |
| 3 ujihe ningge ara. | 養ったもの。 |
| 4 sergudai fiyanggo ara. | Sergudai Fiyanggo |
| 5 bi simbe sabuhade ara. | 私はおまえを見たときに |
| 6 ambula urgunjehe ara. | たいへん喜んだ。 |
| 7 ere utala morin ara. | このこれ程の馬 |
| 8 ihan honin adun ara. | 牛、羊の群 |
| 9 we salire ara. | だれが受けつぐだろう。 |
| 10 age i ambalinggo ara. | 皇子の気概大なること |
| 11 sure genggiyen ara. | 賢く聡明なること |
| 12 ambula akdahabihe ara. | おいに信じていた。 |
| 13 yalure akta ara. | 乗る馬 |
| 14 ya age yalure ara. | どんな皇子が乗るだろう。 |
| 15 aha nehu ara. | 奴僕、下女 |

- | | | |
|----|-----------------------|----------------|
| 16 | bihe seme ara. | いたとて |
| 17 | ya ejin takūrara ara. | どんな主人がつかわすだろう。 |
| 18 | aculan giyahūn ara. | 驚みみづく |
| 19 | bihe seme ara. | いたとて |
| 20 | ya jui alire ara. | どんな子が受けるだろう。 |
| 21 | kuri indahūn ara. | 斑紋のある犬 |
| 22 | bihe seme ara. | いたとて |
| 23 | ya juse kutulere ara. | どんな子供が牽くだろう。 |

* Sergudai Fiyanggo の葬儀に際して、父 Baldu Bayan が演唱したもの。
特に後半15以後の3行ずつからなる各節の構成の平行性が顕著である。これに照らして13・14間にも bihe seme ara の1行を補うならば、全体が3行ずつの節からなると見ることができよう。

<2> (16—17)

- | | | |
|----|------------------------|-------------|
| 1 | eme i sure age ara. | 母の賢い皇子、 |
| 2 | eme mini ara. | 母 私の |
| 3 | enen juse ara. | 後裔の子供 |
| 4 | jalin sain be ara. | のために善を |
| 5 | yabume baifi ara. | 行ない求めて |
| 6 | hūturi baime ara. | 福を求めて、 |
| 7 | susai sede ara. | 五十歳で |
| 8 | banjiha sure ara. | 生まれた賢い |
| 9 | genggiyen age ara. | 聡明な皇子。 |
| 10 | gala dacun ara. | 手早く |
| 11 | gabsihiyan age ara. | 敏捷な皇子。 |
| 12 | giru saikan ara. | 骨格美しく |
| 13 | gicihiyan age ara. | 顔色潤麗な皇子。 |
| 14 | bithe hūlara ara. | 書を読む |
| 15 | jilgan haihūngga ara. | 声柔いこと。 |
| 16 | eme sure age ara. | 母の賢い皇子 |
| 17 | te ya jui de ara. | 今どんな子に |
| 18 | nikeme banjimbi ara. | 寄りかかって生きるか。 |
| 19 | ahasi de gosingga ara. | 奴僕達に情けある |
| 20 | ambulingga age ara. | 気慨大なる皇子。 |
| 21 | giru muru ara. | 骨格風貌 |
| 22 | hocohūn age ara. | すぐれた皇子。 |
| 23 | fiyan banin ara. | 顔色姿 |

- 24 pan an i gese ara. 潘安のように
 25 saikan age ara. 美しい皇子。
 26 eme giya de ara. 母 街に
 27 šodome yabuci ara. 歩き回りに行けば
 28 giyahūn adali ara. 鷹のように
 29 eme jilgan be ara. 母 声を
 30 donjime baire ara. 聞き求めるだろう。
 31 holo de yabuci ara. 山谷に行けば
 32 honggo jilgan ara. 神鈴の音。
 33 eniye hocohūn age ara. 母のすぐれた皇子
 34 eniye bi te ara. 母の私は今
 35 ya emu age be ara. どんな皇子を
 36 tuwame bimbi ara. 見ているか
 37 gosime tembi ara. 愛して住むか。

* <1>に続けて Sergudai の母が演唱したもの。

12. D: saidan は誤植。

24. pan an は美貌で知られた晋の人, 潘安仁 (D47の注参照)。

<3> (18)

- 1 deyangku deyangku
 2 duka tuwakiyara deyangku deyangku 門を見張る
 3 aguta sa donji deyangku deyangku 兄長達聞け。
 4 sini ejin de deyangku deyangku おまえの主人に
 5 genefi alanareo deyangku deyangku 行って告げに行ってくれ。
 6 duka tulergide deyangku deyangku 門の外に
 7 bucere sakda deyangku deyangku 死にそうな老人
 8 jihebi sereo deyangku deyangku 来ていると言ってくれ。
 9 majige acaki sereo deyangku deyangku ちょっと会いたいと言ってくれ
 10 seme jihese deyangku deyangku と言って来たと言え。
 11 majige gūnin deyangku deyangku ほんの志に
 12 hoošan deiijimbi deyangku deyangku 紙を焼く。

* 葬儀中の Baldu Bayan 宅の門を不意に訪れた老人の演唱。

5. D: alarareo は誤植。

12. 葬儀の時に紙銭 (hoošan jiha) を焼く風習を言ったもの。D48の注参照。

<4> (19—20)

- 1 age i haji. ara koro. 皇子の親密な

2 absi utu ara koro.	何とこんなに
3 jalgan foholon ara koro.	命短い。
4 sure banjiha ara koro.	賢く生まれた
5 seme donjiha ara koro	と聞いた
6 sungken aha bi ara koro	やせ弱った奴僕の私は
7 urgunjehe bihe ara koro	喜んでいた。
8 mergen age be ara koro.	賢い皇子を
9 ujihe seme ara koro.	養ったと
10 algin donjifi ara koro	評判聞いて
11 mentuhun aha bi ara koro	愚かな奴僕の私は
12 erehe bihe ara koro	希望していた。
13 erdemu bisire ara koro	才ある
14 age be banjiha ara koro	皇子を生んだ
15 seme donjifi ara koro	と聞いて
16 ehelinggo aha bi ara koro	庸愚懦弱な奴僕の私は
17 akdaha bihe ara koro	信じていた。
18 fengšen bisire ara koro	幸福ある
19 age be donjifi ara koro	皇子を聞いて
20 ferguwehe bihe ara koro	驚嘆していた。
21 age absi buceheni ara koro	皇子どうして死んだか。

* 〈3〉と同様、老人の演唱したもの。以下の叙述ではこの老人は Baldu Bayan にシャーマンによる蘇生を示唆し、Nišan Saman の存在を知らせた後、「五色の雲」に乗って飛び去るところから、神の使いのような存在であることがわかる。詩としては4—7, 8—12, 13—17, 18—20の各節がいずれも類以表現の反復であることが注意される。

2. V, S, C, D すべて udu と読んでいるが原文は明らかに utu であり、文語 uttu にあたると見た方が解釈上も無理がない。文語 uttu に対して utu が現われる他の例は原資料(12)にも見える。

6. sungken の語義は不明であるが、sunggambi《病を覚えずして顔色青くやせ弱る》と関係があると見ておく。cf. S46, D128—129。

〈5〉(27—30)

1 eikule yekule	
2 ere baldu halai eikule yekule	この Baldu 姓の
3 muduri aniyangga eikule yekule	龍年生まれの
4 haha si donji eikule yekule	男、おまえ聞け。
5 han be tuwabume eikule yekule	皇帝を引見しに
6 jihe age eikule yekule	来た兄長

7	getuken donji eikule yekule	よく聞け。
8	waka seci eikule yekule	非を言えば
9	waka sebai eikule yekule	非と言うのだ。
10	holo seci eikule yekule	嘘を言えば
11	holo sebai eikule yekule	嘘と言うのだ。
12	holo saman holtombi eikule yekule	にせのシャーマンは嘘をつく
13	suwende alarao eikule yekule	おまえ達に告げてもらえまいか。
14	orin sunja sede eikule yekule	二十五歳で
15	emu haha jui eikule yekule	一人の男の子
16	ujihe bihe eikule yekule	養っていた。
17	tofohon se ofi eikule yekule	十五歳になって
18	heng lang šan eikule yekule	Heng Lang šan
19	alin de eikule yekule	山に
20	abalame genefi eikule yekule	狩に行って、
21	tere alin de eikule yekule	その山で
22	kumuru hutu eikule yekule	Kumuru 鬼
23	sini jui i eikule yekule	おまえの息子の
24	fainggo be eikule yekule	魂を
25	jafame jefi eikule yekule	取って食って、
26	ini beye eikule yekule	彼の体
27	nimeku bahafi eikule yekule	病氣になって
28	bucehe bi eikule yekule	死んだのだ。
29	tereci juse eikule yekule	それから子供
30	ujihe akūbi eikule yekule	養わなかった。
31	susai sede eikule yekule	五十歳で
32	emu haha jui eikule yekule	一人の男の子
33	sabufi ujihebi eikule yekule	見て養った。
34	susai sede eikule yekule	五十歳で
35	banjiha ofi eikule yekule	生まれたので
36	gebube sergudai eikule yekule	名を Sergudai
37	fiyanggo sembi eikule yekule	Fiyanggo と言う
38	seme gebulehebi eikule yekule	と名づけたのだ。
39	mergen gebu mukdehebi eikule yekule	賢い名興った
40	amba gebu tucikebi eikule yekule	偉大な名出た。
41	tofohon se ofi eikule yekule	十五歳になって
42	julergi alin de eikule yekule	南の山で
43	gurgu be ambula eikule yekule	獣をたくさん

- | | | |
|----|-----------------------------------|---------------|
| 44 | waha turgunde eikule yekule | 殺したので、 |
| 45 | ilmun han donjifi eikule yekule | 閻魔王聞いて |
| 46 | hutu be takūrafi eikule yekule | 鬼をつかわして |
| 47 | fainggo be jafari eikule yekule | 魂をとらえて |
| 48 | gamaha bi kai eikule yekule | 取ったのだ。 |
| 49 | weijubure de mangga eikule yekule | よみがえらすのにむずかしい |
| 50 | aitubure de jobombi eikule yekule | 助けるのに難儀する。 |
| 51 | inu seci inu se eikule yekule | 然りならば然りと言え |
| 52 | waka seci waka se eikule yekule | 非を言えば非と言え。 |

* Baldu Bayan の訪問を受けた Nišan Saman が、求めに応じて Sergudai Fiyanggo の死の状況を占ったもの。シャーマンは依頼者をめぐる状況をあらかじめ正しく言いあてることにより自分の能力を示す必要があるとされていた。D50の注参照。

5. この場合の han についてはD 131 の注参照。

20・21. Dの転写ではこの2行が脱漏している。

39. D: mukdeheci は誤植。

<6> (36)

- | | | |
|---|-------------------------------|-------------|
| 1 | hoge yage | |
| 2 | wehei ukdun hoge yage | 石の洞屈 |
| 3 | ukcame jidereo hoge yage | のがれて来てくれ、 |
| 4 | hahilame eburnjireo hoge yage | 急いでおりて来てくれ。 |

* Nišan Saman が神 (weceku) に対して、自分にのり移りにやってくるよう求めている。全詩中で最も短い。Sinor (p. 113) はこの詩と次の<7>の詩とを連続した一篇と見なしているようであるが、明らかな地の文が介在し、また両詩の内容・形式の点からも独立の二篇の詩と見るべきである。

<7> (36—38)

- | | | |
|----|----------------------------|------------|
| 1 | hoge yage | |
| 2 | dalbade iliha hoge yage | 傍らに立った |
| 3 | dalaha jari hoge yage | かしらとなった助手。 |
| 4 | adame iliha hoge yage | 付き従って立った |
| 5 | amba jari hoge yage | 偉大な助手。 |
| 6 | hanci iliha hoge yage | 近くに立った |
| 7 | haihūngga jari hoge yage | 柔い助手。 |
| 8 | šurdeme iliha hoge yage | 取り巻いて立った |
| 9 | sure jari hoge yage | 賢い助手。 |
| 10 | nekeliyen šan be hoge yage | 薄い耳を |

11	neifi donji hoge yage	開いて聞け。
12	giramin šan be hoge yage	厚い耳を
13	gidafi donji hoge yage	押しつけて聞け。
14	amila coko be hoge yage	雄鶏を
15	uju bade hoge yage	頭の所に
16	hūwaitafi belhe hoge yage	しばって備えよ。
17	kuri indahūn be hoge yage	斑紋のある犬を
18	bethe jakade hoge yage	足あるので
19	siderefi belhe hoge yage	つないで備えよ。
20	tanggū dalhan hoge yage	百塊の
21	fe misun be hoge yage	古い味噌を
22	dalbade sinda hoge yage	傍に置け。
23	tanggū sefere hoge yage	百勺の
24	suseri hoošan be hoge yage	粗紙を
25	hosifi belhe hoge yage	巻いて備えよ。
26	farhūn bade hoge yage	暗黒の地に
27	fainggo be farganambi hoge yage	魂を追って行く。
28	bucehe gurun de hoge yage	死んだ国に
29	buhime genembi hoge yage	疑って行く。
30	ehe bade hoge yage	悪い所に
31	ergen be ganambi hoge yage	命を取りに行く。
32	tuheke fainggo be hoge yage	落ちた魂を
33	tungiyeme yombi hoge yage	拾いに行く。
34	akdaha jari hoge yage	信じた助手
35	yarume gamareo hoge yage	導いて連れて行ってくれ、
36	yargiyan fede hoge yage	本当にかんばれ。
37	aitubume jidere de hoge yage	助けに来るときに
38	oforo šurdeme hoge yage	鼻のまわりに
39	orin damjin hoge yage	二十秤
40	muke makta hoge yage	水放て。
41	dere šurdeme hoge yage	顔のまわりに
42	dehi hunio hoge yage	四十桶
43	muke hungkure hoge yage	水を垂らせ。

* Nišan Saman が助手に対して神事の準備等を指示している。特に2行からなる節の頭韻が顕著である。なお Sinor (p.114) の引用では10・11間および12・13間の折返し句がぬかされ、各2行が1行として記されている。これはVの転写の誤りを踏襲したものである。

10・12. Dの転写ではいずれの行も be が脱漏している。

33. D: *tunggiyeme* の転写は正確でない。本資料では文語のつづり *-ngg-* が *i, e* の前で *-ng-* と書かれる例が他にも見られる。S17参照。

<8> (39)

- | | | |
|----|---|-------------------|
| 1 | <i>cingelji ingelji</i> | |
| 2 | <i>dengjan ayan be cingelji ingelji</i> | 燈蠟を |
| 3 | <i>farhūn obufi cingelji ingelji</i> | 真暗にして、 |
| 4 | <i>ineku yamji de cingelji ingelji</i> | 今晚に |
| 5 | <i>bayara halai cingelji ingelji</i> | Bayara 姓の |
| 6 | <i>sergudai fiyanggo cingelji ingelji</i> | Sergudai Fiyanggo |
| 7 | <i>fainggo jalin cingelji ingelji</i> | 魂のために |
| 8 | <i>hungken de hujufi cingelji ingelji</i> | 叩頭に平伏して、 |
| 9 | <i>farhūn bade cingelji ingelji</i> | 暗黒の地に |
| 10 | <i>fainggo be fargambi cingelji ingelji</i> | 魂を追う。 |
| 11 | <i>ehe bade cingelji ingelji</i> | 悪い所に |
| 12 | <i>ergen be ganambi cingelji ingelji</i> | 命を取りに行く。 |
| 13 | <i>tuheke fainggo be cingelji ingelji</i> | 落ちた魂を |
| 14 | <i>tunkiyeme gajimbi cingelji ingelji</i> | 拾って取って来る。 |
| 15 | <i>hutu de hosungge cingelji ingelji</i> | 鬼に力のある |
| 16 | <i>ibagan de icingga cingelji ingelji</i> | 妖怪に見さかいのつく。 |
| 17 | <i>abkai fejergide cingelji ingelji</i> | 天の下に |
| 18 | <i>algin bihe cingelji ingelji</i> | 評判あった。 |
| 19 | <i>geren gurunde cingelji ingelji</i> | 多くの国に |
| 20 | <i>gebu bihe cingelji ingelji</i> | 名あった。 |

* *Nišan Saman* の助手 *Nari Fiyanggo* の演唱。Dは折返し句を *cinggelji inggelji* と転写しているが正確でない（本稿<7>33の注参照）。

<9> (40—42)

- | | | |
|---|---------------------------------------|-------------|
| 1 | <i>hobage yebage</i> | |
| 2 | <i>dogūn dobure hobage yebage</i> | 渡し場渡らせる |
| 3 | <i>doholo age hobage yebage</i> | 跛の兄長 |
| 4 | <i>donjime gaisu hobage yebage</i> | 聞きとれ。 |
| 5 | <i>nekeliyen šan be hobage yebage</i> | 薄い耳を |
| 6 | <i>neifi donji hobage yebage</i> | 開いて聞け。 |
| 7 | <i>giramin šan be hobage yebage</i> | 厚い耳を |
| 8 | <i>gidafi donjireo hobage yebage</i> | 押しつけて聞いてくれ。 |

9	arsun laihi hobage yebage	醜い無頼漢
10	ejeme donjireo hobage yebage	覚えて聞いてくれ。
11	wecen sain de hobage yebage	供物良いので
12	wesihun oho hobage yebage	貴かった。
13	jukten sain de hobage yebage	供物良いので
14	julesi oho hobage yebage	前になった。
15	ejin ilifi hobage yebage	主人立って
16	erdemungge oho hobage yebage	有徳になった。
17	amai dacin de hobage yebage	父の妻の親族に
18	acame genembi hobage yebage	会いに行く。
19	eniyei dancin de hobage yebage	母の実家に
20	ergeneme yumbi hobage yebage	休息しに行く。
21	goro mafa boode hobage yebage	母の父の家に
22	goirame genembi hobage yebage	遅れて行く。
23	goro mama bade hobage yebage	母の母の所に
24	maksime yumbi hobage yebage	舞いに行く。
25	deheme boode hobage yebage	母の妹の家に
26	dekdešeme genembi hobage yebage	叛心を起しに行く。
27	ecike i boode hobage yebage	父の弟の家に
28	ergen be ganambi hobage yebage	命を取りに行く。
29	mimbe doobuci hobage yebage	私を渡らせれば
30	misun bumbi hobage yebage	味噌をやる。
31	hūdun doobuci hobage yebage	すぐに渡らせれば
32	hoošan bumbi hobage yebage	紙をやる。
33	bai dooburakū hobage yebage	むだに渡らせずに
34	basan bumbi hobage yebage	手間賃をやる。
35	unenggi doobuci hobage yebage	誠に渡らせるなら
36	ulin bumbi hobage yebage	貨財をやる。
37	hahilame doobuci hobage yebage	急いで渡らせるなら
38	hatan arki hobage yebage	辛い焼酎
39	alibume bumbi hobage yebage	授けてやる。
40	ehe bade hobage yebage	悪い所に
41	ergen be jolinambi hobage yebage	命を質受けに行く。
42	farhūn bade hobage yebage	暗黒の地に
43	fainggo be farganambi hobage yebage	魂を追って行く。

* Sergudai Fiyanggo の魂を探して死の国 (bucehe gurun) へ旅立った
Nišan Saman が川にさしかかった際、波し場の男に呼びかけたもの。文意

が必ずしも明瞭でない点がある。2行（または3行）を単位とする頭韻が顯著である。

6. D: dongi は誤植。

9. arsun は S69 の指摘にあるように語義・頭韻から考えて ersun の原資料誤記であろう。

17. D は dancin とするが、原資料では dacin と読める。

<10> (44—45)

1	eikuli yekuli	
2	abka be šurdere eikuli yekuli	天をまわる
3	amba daimin eikuli yekuli	大わし。
4	mederi be šurdere eikuli yekuli	海をまわる
5	menggun inggalii eikuli yekuli	銀せきれい。
6	bira cikin be šurdere eikuli yekuli	川辺をまわる
7	cecereku meihe eikuli yekuli	機嫌の悪い蛇。
8	jan bira be šurdere eikuli yekuli	Jan 川をまわる
9	jakūn da jabjan eikuli yekuli	八尋のうわばみ。
10	ajige ejin mini beye eikuli yekuli	小主私自身
11	ere bira be eikuli yekuli	この川を
12	doombi sembi eikuli yekuli	渡ると言う。
13	geren wecense eikuli yekuli	多くの神々
14	wehiyeme dooburo eikuli yekuli	助けて渡らせてくれ。
15	hūdun hasa eikuli yekuli	大急ぎで
16	erdemu be tucibureo eikuli yekuli	徳を現わしてくれ。

* ふたたび川にさしかかった Nišan Saman が神々に助けを求めたもの。

<11> (47—48)

1	monggoldai nakcu hoge yage	Monggoldai Nakcu
2	hūdun hahi hoge yage	大急ぎで
3	tucime jidereo hoge yage	出て来てくれ。
4	ai jalin de hoge yage	何のために
5	sain i banjire hoge yage	よく生きる、
6	jalgan akūngge hoge yage	寿命なきもの
7	jafafi gajiha hoge yage	捕えて連れて行ったか。
8	erin unde hoge yage	時の来ないうちに
9	ergeleme gajiha hoge yage	強いて連れて行ったか。
10	amasi buci hoge yage	後でくれれば

- | | |
|-------------------------------|-------------|
| 11 ambula baniha hoge yage | おおいに感謝。 |
| 12 bai buci hoge yage | ただでくれれば |
| 13 baniha bumbi hoge yage | 感謝する。 |
| 14 banjire aldasi hoge yage | 生きる途中で |
| 15 balai gajiha hoge yage | みだりに連れて行った。 |
| 16 eitereme gajiha hoge yage | 欺いて連れて行った、 |
| 17 aiseme jabumbio hoge yage | 何と答えるか。 |
| 18 bai gamarakū hoge yage | ただでは連れて行かずに |
| 19 basan bumbi hoge yage | 手間賃やる。 |
| 20 holtome gamarakū hoge yage | 偽って連れて行かずに |
| 21 hūda werimbi hoge yage | 代価置いて行く。 |
| 22 minde buci hoge yage | 私にくれれば |
| 23 misun bumbi hoge yage | 味噌やる。 |
| 24 tucibufi buci hoge yage | 出してくれれば |
| 25 turgin bumbi hoge yage | 代金やる。 |
| 26 doigonde buci hoge yage | 前もってくれれば |
| 27 dorolombi hoge yage | 礼を行なう。 |
| 29 geli burakūci hoge yage | 又くれないなら |
| 29 sain ba akū hoge yage | 良い所ない。 |
| 30 weceku hūsunde hoge yage | 神の力で |
| 31 deyeme genembi hoge yage | 飛んで行く。 |
| 32 boo de dosime hoge yage | 家に入って |
| 33 ganame genembi hoge yage | 連れに行く。 |

* 閻魔王 (Ilmun Han) の命を受けて Sergudai を連れ去った Monggoldai

Nakcu の門前までやって来た Nišan Saman の演唱。

17. 疑問詞のある疑問文は疑問語尾 -o を伴わないのが普通。

<12> (51—52)

- | | |
|-------------------------------------|-------------|
| 1 kerani kerani | |
| 2 dergi alin de kerani kerani | 東の山に |
| 3 tomoho kerani kerani | 棲息した |
| 4 dekdere gasha kerani kerani | 飛び立つ鳥。 |
| 5 cangling alin de kerani kerani | Cangling 山に |
| 6 cakūra moo canggisa kerani kerani | 檀木しぎ。 |
| 7 mangkan alin de kerani kerani | Mangkan 山に |
| 8 tomoho kerani kerani | 棲息した |
| 9 mangmoo manggisa kerani kerani | 椽あなぐま |
| 10 uyun da mieihe kerani kerani | 九尋の蛇 |

- | | |
|--------------------------------------|----------------|
| 11 jakūn da jabjan kerani kerani | 八尋のうわばみ。 |
| 12 wehe ukdun kerani kerani | 石の洞屈 |
| 13 sele guwan de kerani kerani | 鉄の館に |
| 14 tomoho kerani kerani | 棲息した |
| 15 taran tašha kerani kerani | 虎（に似た獣） |
| 16 onioko lefu kerani kerani | 熊（に似た獣）。 |
| 17 alin be šurdere kerani kerani | 山をまわる |
| 18 aisin inggali kerani kerani | 金せきれい。 |
| 19 mukden be šurdere kerani kerani | 瀋陽をまわる |
| 20 menggun inggali kerani kerani | 銀せきれい。 |
| 21 deyere giyahūn kerani kerani | 飛ぶ鷹 |
| 22 dalaha daimin kerani kerani | かしらとなった鷺 |
| 23 alaha daimin kerani kerani | 花紋の鷺。 |
| 24 nai jule se kerani kerani | 地の牝鹿達 |
| 25 uyun uri kerani kerani | 九〔語義不明〕 |
| 26 juwan juwe faidan kerani kerani | 十二列の |
| 27 geren julese kerani kerani | 多くの牝鹿達。 |
| 28 hūdun hahi kerani kerani | 急いで |
| 29 deyeme hoton de kerani kerani | 飛んで城に |
| 30 dosifi gajireo kerani kerani | 入って連れて来てくれ。 |
| 31 wašiha ci kerani kerani | 爪から |
| 32 wašihalame gajireo kerani kerani | 引掛けて連れて来てくれ。 |
| 33 šoforo ci kerani kerani | 一つまみから |
| 34 šoforome gajireo kerani kerani | つかんで連れて来てくれ。 |
| 35 aisin hiyanglu de kerani kerani | 金の香炉に |
| 36 alamime tebufi gaju kerani kerani | 背負って座らせて連れて来い。 |
| 37 menggun hiyanglu de kerani kerani | 銀の香炉に |
| 38 ungkufi gaju kerani kerani | 伏せて連れて来い。 |
| 39 meiren i hūsun de kerani kerani | 肩の力で |
| 40 meihereme gajireo kerani kerani | かついで連れて来てくれ。 |

* Nišan Saman はついに閻魔王の城までやって来たが、門が固くとぎされ入ることができないのを知って怒り、鳥や獣の神々に助けを求める。結局この直後に大きな鳥が飛んで来て城中から Sergudai を爪でつかんで連れもどすことになる。

5・6. 前後の表現の平行性に照らせば、この2行間にも tomoho が本来あったかもしれない。

13. guwan について筆者は以前に guwangse 《木柵》の語末省略形とみたが、

シナ語「館」の借用語とみた方が無理がないかもしれない。cf. Tsumagari, T., "Interpretation of some words in *Nišan Saman i Bithe*", *Manchu Studies Newsletter*, Issue 3, Bloomington, (forthcoming)。

24. jule の語義について S は《醜鬼》(文語 jolo), D は《はげたか》(文語 yolo) とするが、ここでは《牝鹿》(文語 jolo) と見ておく。

<13> (61—63)

- | | | |
|----|--------------------------------------|---------------|
| 1 | eigen haji. hailambi šulembi | 夫 親愛な |
| 2 | ekšeme donji hailambi šulembi | 急いで聞け。 |
| 3 | haha haji hailambi šulembi | 男 親愛な |
| 4 | hahilame donji hailambi šulembi | 急いで聞け。 |
| 5 | nekeliyen šan be hailambi šulembi | 薄い耳を |
| 6 | neifi donji hailambi šulembi | 開いて聞け。 |
| 7 | giramin šan be hailambi šulembi | 厚い耳を |
| 8 | gidafi donjireo hailambi šulembi | 押しつけて聞いてくれ。 |
| 9 | sini beye hailambi šulembi | おまえの体 |
| 10 | siren sube lakcaha hailambi šulembi | 臆筋切れた。 |
| 11 | aifini bucefi hailambi šulembi | すでに死んで |
| 12 | aikime niyaha hailambi šulembi | 乾いて朽ちた。 |
| 13 | giranggi yali hailambi šulembi | 骨肉 |
| 14 | gemu hungkenehe hailambi šulembi | 皆柔くなった。 |
| 15 | absi weijubumbi hailambi šulembi | どうしてよみがえらせるか。 |
| 16 | haji eihen hailambi šulembi | 親愛な夫 |
| 17 | gūsime gūnici hailambi šulembi | いとしく思うなら |
| 18 | dulembume unggireo hailambi šulembi | 見のがして行かせてくれ。 |
| 19 | sini eifu de hailambi šulembi | おまえの墓に |
| 20 | hoošan jiha be hailambi šulembi | 紙錢を |
| 21 | labdu deiire hailambi šulembi | たくさん焼こう。 |
| 22 | buda sogi be hailambi šulembi | 飯菜を |
| 23 | labdu doboro hailambi šulembi | たくさん供えよう。 |
| 24 | sini eniye hailambi šulembi | おまえの母 |
| 25 | eršeme kundulembi hailambi šulembi | 面倒見て恭しくしよう。 |
| 26 | erebe gūnici hailambi šulembi | これと思うなら |
| 27 | ergen be guwebureo hailambi šulembi | 命を免じてくれ。 |
| 28 | sakda eme be hailambi šulembi | 老母を |
| 29 | šar seme gūnifi hailambi šulembi | あわれみ思っ |
| 30 | hor seme dulembureo hailambi šulembi | さっと通らせてくれ。 |

* 首尾よく Sergudai を取り戻して帰り道を急ぐ Nišan Saman の前に、彼女の亡夫が現われ現世によみがえらせるように求めるが、夫をこころよく思わない彼女はこの申し出をことわる。

25. V, S, C, D すべて kufulembi と転写するが明らかに kundulembi と読める。

<14> (64—65)

- | | | |
|----|--------------------------------------|--------------|
| 1 | haji eigen si donji. denikun denikun | 親愛な夫、おまえ聞け |
| 2 | si bucerede denikun denikun | おまえが死ぬときに |
| 3 | aibe werihe denikun denikun | 何を残したか。 |
| 4 | yadara boigon de denikun denikun | 貧窮する一家に |
| 5 | sini sakda eniye be denikun denikun | おまえの老母を |
| 6 | minde werihe denikun denikun | 私に残した。 |
| 7 | bi kunduleme ujimbi denikun denikun | 私は恭しく養う |
| 8 | faššame hiyoošulambi denikun denikun | 骨を折って孝行する。 |
| 9 | eihen beye denikun denikun | 夫自分で |
| 10 | gūnime tuwa denikun denikun | 考えてみよ。 |
| 11 | uthai balingga denikun denikun | すなわち恩ある |
| 12 | niyalma inu kai denikun denikun | 人なのだ。 |
| 13 | mangga mujin be denikun denikun | 強い志を |
| 14 | bi tucibufi denikun denikun | 私は現して |
| 15 | simbe majige denikun denikun | おまえを少々 |
| 16 | amtalambume tuwaki denikun denikun | 試してみたい。 |
| 17 | sini kira mangga be denikun denikun | おまえの顔むずかしいのを |
| 18 | eberebume tuwaki denikun denikun | 減じてみよう。 |
| 19 | umesi bade denikun denikun | ひどい場所に |
| 20 | unggimbi kai denikun denikun | つかわせるのだ。 |
| 21 | weceku de baime denikun denikun | 神に求めて |
| 22 | bujan be šurdere denikun denikun | 林をまわる |
| 23 | amba bulehun denikun denikun | 大きな鶴、 |
| 24 | hūdun hahi denikun denikun | 大急ぎで |
| 25 | mini eihen be denikun denikun | 私の夫を |
| 26 | šoforome jafari denikun denikun | 引つつかんで |
| 27 | fungtu hoton de denikun denikun | Fungtu 城に |
| 28 | maktafi enteheme denikun denikun | 放り投げて永遠に |
| 29 | tumen jalan de denikun denikun | 万世に |
| 30 | niyalmai beyede denikun denikun | 人の体に |

- 31 banjiburakū obuki denikun denikun 生まれさせなくしてほしい。

* よみがえらせなければ油鍋で焼き殺すと、おどす夫に対し Nišan Saman が怒って答えたもの。

25. Dの転写では be が脱漏している。

27. Fungtu 城についてはD74の注参照。

<15> (66)

- 1 deyangku deyangku
- 2 eigen akū de deyangku deyangku 夫いないので
- 3 enchešeme banjiki deyangku deyangku 如才なくふるまって暮らしたい。
- 4 haha akū de deyangku deyangku 男いないので
- 5 kangtaršame banjiki deyangku deyangku 昂然とふるまって暮らしたい。
- 6 eniye hūcihin de deyangku deyangku 母の親類に
- 7 efime banjiki deyangku deyangku たわむれて暮らしたい。
- 8 se be amcame deyangku deyangku 歳を追って
- 9 sebjeme banjiki deyangku deyangku 楽しんで暮らしたい。
- 10 juse akū de deyangku deyangku 子供いないので
- 11 julesi ome banjiki deyangku deyangku 前になって暮らしたい。
- 12 hala mukūn akū de deyangku deyangku 一族いないので
- 13 hajilame banjiki deyangku deyangku 親密に暮らしたい。
- 14 asigan be amcame deyangku deyangku 少年を追って
- 15 antahašame banjiki deyangku deyangku 客のように暮らしたい。

* 祈り通り、大きな鶴が現われて夫を連れ去ったのを見て、Nišan Saman が演唱する。2行ずつからなる節の頭韻と表現の平行性が顕著である。なお Sinor (pp. 112-113) はこの詩の引用・分析に際して第2・3行を漏らしている。

<16> (80—81)

- | | |
|-----------------------|-----------|
| 1 ke keku keku | |
| 2 ere yamji keku | 今晚 |
| 3 dengjan la be keku | 燈火、ろうそくを |
| 4 gida nufi keku | 共に隠して、 |
| 5 ainaha algin keku | どんな名声 |
| 6 weinehe welgin keku | だれの名声。 |
| 7 halai hashūri keku | 姓の〔語義不明〕 |
| 8 yala yashūri keku | 誠に〔語義不明〕。 |
| 9 bayar hala keku | Bayar 姓の、 |

- | | | |
|----|---------------------------|-------------------|
| 10 | abdaha de arsuha keku | 葉に芽が出た |
| 11 | fulehe de fusuhe keku | 根に繁殖した。 |
| 12 | sergudai fiyanggo keku | Sergudai Fiyanggo |
| 13 | abalame genefi keku | 狩に行つて |
| 14 | nimekulefi bucehe keku | 病氣になつて死んだ。 |
| 15 | erei turgunde keku | このゆえに、 |
| 16 | ilan saman ilgaci keku | 三人のシャーマンが判別すれば |
| 17 | duin saman dekeneci keku | 四人のシャーマンが計れば。 |
| 18 | ere fainggo be keku | この魂を |
| 19 | bucehe gurun keku | 死んだ国 |
| 20 | ilmun han keku | 閻魔王 |
| 21 | gamaha sembi keku | 連れて行つたという。 |
| 22 | erei turgunde keku | このゆえに |
| 23 | nisihai birai keku | Nisihai 川の |
| 24 | dalin de tehe keku | 河岸に住んだ、 |
| 25 | ursu gurun de keku | 多くの人の国に |
| 26 | uju tucike keku | 頭出た。 |
| 27 | amba gurun de keku | 大きな国に |
| 28 | algin tucike keku | 名声出た。 |
| 29 | ayan hiyan be keku | 大香を |
| 30 | jafame gaifi keku | つかみ取り |
| 31 | alin be dabame keku | 山を越えて |
| 32 | amcame genefi keku | 追って行き |
| 33 | algin be gaihade keku | 名声を得たときに |
| 34 | jorime tuwaha keku | 指示してみた。 |
| 35 | adališara jakade keku | 似ているので |
| 36 | baime gajifi keku | 求め連れ来て |
| 37 | ineku yamji de keku | 今晚に、 |
| 38 | farhūn bade keku | 暗黒の地に |
| 39 | fayanggo be fargaha keku | 魂を追つた。 |
| 40 | ehe bade keku | 悪い所に |
| 41 | ergen be ganaha bihe keku | 命を取りに行つていた。 |
| 42 | amasi marime jifi keku | 後で戻つて来て |
| 43 | lelii fodoho keku | 広いしだれ柳、 |
| 44 | da gargan de keku | 根もとの枝に |
| 45 | dalaha daimin keku | かしらとなつた鷲。 |
| 46 | adame gargan de keku | 付き従つた枝に |

47	alaha daimin keku	花紋のある鶯。
48	alin be šurdere keku	山をまわる
49	aisin inggalii keku	金せきれい。
50	mukden be šurdere keku	瀋陽をまわる
51	menggun inggalii keku	銀せきれい。
52	taran tasha keku	虎(に似た獣)
53	oniku lefu keku	熊(に似た獣)。
54	jakūn da jabjan keku	八尋のうわばみ
55	uyun da meihe keku	九尋の蛇。
56	cakūra moo falga keku	檀木の茂み
57	jakūn juru manggi keku	八対のあなぐま。
58	mang moo falga keku	橡の茂み
59	juwan juru manggi keku	十対のあなぐま。
60	weijubume jiki keku	よみがえらせに来てくれ
61	aitubume gaiki keku	助けに取りたい。
62	gele gete keku	よくなれ、目ざめよ。

* 死の国への旅を終えて Sergudai を連れ帰った Nišan Saman を目覚めさせるため、助手 Nari Fiyanggo が演唱したもの。23-28は Nišan のこと、29-36は Baldu Bayan の行動を表わしている。

9. S, C, D とも bayari と転写するが正しくない。

47. S, C, D とも alha と転写するが、alaha と読める。

57・59. manggi は〈12〉9に見える manggisa (文語 manggisu) の -saが複数接尾辞と見なされておとされたと考えられる。満州語では一般に明確な数表現のあとでは複数接尾辞を伴わない形が用いられる: Doerfer, G. "Der Numerus nach Zahlwörtern im Mandshu", *Studia Altaica*, Wiesbaden, 1957, p. 48参照。

<17> (82-85)

1	deyangku deyangku	
2	geren niyalma jari donji deyangku deyangku	多くの人、助手聞け
3	baldu bayan sini beye deyangku deyangku	Baldu Bayan おまえ自身
4	emke emken donji bai deyangku deyangku	ひとつひとつ聞くのだ。
5	sini jui be deyangku deyangku	おまえの子を
6	aisin hiyanglu de deyangku deyangku	金の香炉に
7	tebume gajiha deyangku deyangku	のせて連れて来た。

- 8 šoforo de šoforome deyangku deyangku 一つまみでつかんで
- 9 gajime jihe kai deyangku deyangku 連れて来たのだ。
- 10 boobai oho de deyangku deyangku 宝物を脇の下に
- 11 hafirame gajiha deyangku deyangku はさんで取って来た。
- 12 bucehe beyede deyangku deyangku 死んだ体に
- 13 weijubuebi deyangku deyangku よみがえらせたのだ。
- 14 fayangga be oron beyede deyangku deyangku
魂をからの体に
- 15 singgebume sindahabi deyangku deyangku
入らせて置いたのだ。
- 16 omosi mama de baiha kerani kerani 福神に求めた
- 17 ereci amasi kerani kerani これより後
- 18 nimeku yangšan kerani kerani 病氣, 小児病
- 19 akū obume kerani kerani なくなって
- 20 banjikini sehe kerani kerani 暮らすようにと言った。
- 21 uyunju se jalgan kerani kerani 九十歳の命
- 22 ulgun be tolome kerani kerani 亥を数えて
- 23 uyun juse ujikini kerani kerani 九人の子供養うように。
- 24 gamaha ilmun han de kerani kerani 連れて行った閻魔王に
- 25 koko indahūn be kerani kerani 鶏, 犬を
- 26 baili de werihe kerani kerani 礼に残した
- 27 basan jergi be werihe kerani kerani 手間賃等を残した。
- 28 omosi mama de kerani kerani 福神に
- 29 hengkileme acaha kerani kerani 叩頭して会った。
- 30 sini jui de kerani kerani おまえの子に
- 31 geli enen baiha kerani kerani 又子孫求めた。
- 32 jalan de ulhibure kerani kerani 世に悟らせよう。
- 33 mama eršere de kerani kerani 福神に仕えるのに
- 34 ginggun bolgo i kerani kerani 敬い清浄で
- 35 mama ilha sain kerani kerani 福神花良い。
- 36 damu sain be yabu kerani kerani ただ善を行なえ
- 37 ehe be yabuci kerani kerani 悪を行なえば
- 38 eiten erun iletu kerani kerani 一切の刑明らかだ
- 39 gemu getuken sabuha kerani kerani 皆明白に見た。
- 40 mini eigen mimbe kerani kerani 私の夫が, 私を
- 41 aitubu seme kerani kerani 助けよと
- 42 baire jakade kerani kerani 求めるので,

- | | | |
|----|---|--------------|
| 43 | mini gisun oci kerani kerani | 私のことは |
| 44 | yali sube niyaha kerani kerani | 肉筋腐った |
| 45 | weijubure de mangga kerani kerani | よみがえらすのに困難だ。 |
| 46 | mini eigen fancafi kerani kerani | 私の夫は憤り恨んで |
| 47 | nimenggi mucen de kerani kerani | 油鍋で |
| 48 | mimbe carume wambi kerani kerani | 私をいためて殺す。 |
| 49 | erei turgunde kerani kerani | このゆえに |
| 50 | mini wecen šoforofi kerani kerani | 私の神が引つつかんで |
| 51 | fungtu hoton de kerani kerani | Fungtu 域に |
| 52 | maktafi enteheme kerani kerani | 放り投げて永遠に |
| 53 | niyalmai beye banjiburakū kerani kerani | 人の体生まれさせない。 |
| 54 | geli geren hutu deyangku deyangku | 又多くの鬼 |
| 55 | fainggo se deyangku deyangku | 靈魂達、 |
| 56 | aitubu seme deyangku deyangku | 助けよと |
| 57 | siran i baime deyangku deyangku | 次々と求めて |
| 58 | jugūn be heturefi deyangku deyangku | 道をさえぎって |
| 59 | bairengge jilaka deyangku deyangku | 求めることあわれだ |
| 60 | jaci labdu kai deyangku deyangku | はなはだ多いのだ。 |
| 61 | labdu basan werihe deyangku deyangku | 多くの手間賃残した |
| 62 | geren dendehe deyangku deyangku | たくさん分け与えた |
| 63 | teni waliyame jihe deyangku deyangku | やっと棄てて来た。 |

* Nišan Saman が死の国でのいきさつを人々に報告したもの。

27. D の転写では werihe が脱漏している。

36. D の転写では yabu が脱漏している。

62. V, S, C, D とも de/dehe と転写するが、原資料では dendehe とも読め、その方が意味上の無理がない。

4. 詩 一 覧

以上17の詩を、演唱者、折返し句、主たる内容等につき一覧表にして示す。

詩番号	演唱者	折返し句	冒頭の 折返し句	行数	内 容
1	父	ara	—	23	Sergudai の追悼
2	母	ara	—	37	Sergudai の追悼
3	老人	deyangku deyangku	+	12	Bayan 家への訪問
4	老人	ara koro	—	21	Sergudai の追悼
5	Nišan	eikule yekule	+	52	死の状況の占い
6	Nišan	hoge yage	+	4	神への呼びかけ
7	Nišan	hoge yage	+	43	助手への指示
8	Nari	cingelji ingelji	+	20	死の国への導入
9	Nišan	hobage yebage	+	43	渡し場の男への呼びかけ
10	Nišan	eikuli yekuli	+	16	川辺での神々への呼びかけ
11	Nišan	hoge yage	—	33	Monggoldai Nakcu の 門前での訴え
12	Nišan	kerani kerani	+	40	閻魔王の門前での神々への 呼びかけ
13	Nišan	hailambi šulembi	—	30	夫への説得
14	Nišan	denikun denikun	—	31	夫への非難
15	Nišan	deyangku deyangku	+	15	夫がいなくなった ことの喜び
16	Nari	keku	+	62	Nišan の覚醒のための神 々への呼びかけ
17	Nišan	deyangku deyangku ~kerani kerani	+	63	死の国でのいきさつの報告

II. 分 析

1. 折 返 し 句

1. 1 本資料の詩においては折返し句がきわめて重要な特徴をなしている。本資料の詩はいずれも本来ある旋律を伴って歌われたものと考えられ、その際折返し句は調子をととのえるためのかけ声のような役割を担うものであったろう。また本資料にあっては、詩の存在を明瞭にするのみならず、各行に繰返されることによって行の構成を明確にする効果を持っている。この効果は同時に、行ごとの頭韻がある場合にはそれをきわ立たせる役目を果していると言えよう。

1. 2 折返し句は多くの場合それ自体特別の意味をもたないと言えるが、詩の内容にふさわしい意味を担っていると考えられる場合もある。たとえば〈1〉〈2〉〈4〉に見える ara は通常苦痛の声を表わす間投詞とされており、Sergudai の死をいたむ詩の内容にふさわしいものとなっている。〈4〉にはまた koro 《怨み、怨恨、悔しさ》の語が折返し句として用いられており、詩の情感を高めている。また〈13〉の hailambi šulembi は動詞の終止形であり、それぞれ《神が享けぬ》、《税を取立てる》の意をもつが、ことに前者は夫の頼みを断わるこの詩の拒絶的な内容にふさわしい意味を添えていると言えよう。なおまた〈16〉の keku は通常《懸壺垂》の意であるが、他の文献で神体名として現われた例もあり、かかる意味とあながち無関係ではないかもしれない(三田村 p. 548 参照)。

他の折返し句については意味不明と言うほかないが、本来は何らかの有意な語であったかもしれない。あるいは動物や鳥の鳴声、シャーマンの太鼓の音などを模したところに起源をもつものもあろう。特に deya-ngku, hoge, yage, hobage, yebage, kerani など満州語の通常の母音配列の原則にそぐわない形のもは何らかの音象徴にもとづく可能性が大きいと考えられる。

いずれにせよ意味の明らかでないことばを繰返すこと自体が、シャーマンの神格化を高めるのに一役かったということも考えられよう。逆にこの点で, Sergudai の父母による〈1〉〈2〉の詩が素朴な間投詞を用いていることは容易に納得できるのである。

1. 3 なお本資料では詩の大半が Nišan Saman の演唱であるために、一般に折返し句が演唱者によって異なるものであるか否かは必ずしも明らかにし得ない。しかし異なる演唱者が同じ折返し句を用いているのは〈1〉〈2〉以外にはまれであり、わずかに老人の詩のひとつが Nišan の用いているものと一致するのみである。特に助手 Nari Fiyan-ggo の折返し句が Nišan のものと趣を異にするところから見て、一般にシャーマン（またはそれに準ずる者）はそれぞれ固有のいくつかの折返し句をもっていたものかもしれない¹⁰⁾。

1. 4 折返し句は原則的に同一詩内では同じものが繰返される。例外は〈17〉で、ここでは deyangku deyangku~kerani kerani~deyangku deyangku と途中でいったん折返し句が交替している。折返し句の変わり目では詩の内容も転じていることが注意される。また〈16〉では keku という折返し句が、冒頭の行のみ ke keku keku と引伸ばされたような形で現われる。

折返し句は①1語の場合(〈1〉〈2〉〈16〉), ②同一語2語の反復からなる場合(〈3〉〈12〉〈14〉〈15〉〈17〉), および③異なる2語からなる場合(その他)がある。③の場合は〈4〉(ara koro), 〈13〉(hailambi šulembi)を除き、前後の初音節のみ異なる。〈4〉〈13〉も前後の音節構造は類似していると言えよう。また①はすべて2音節からなり、②はすべて各語3音節、③は各語2音節のものと3音節のものがある。したがって各詩の折返し句部分の音節数は2, 4, 6のいずれかである。

2. 行

2. 1 各詩は折返し句と詩句(詩の折返し句以外の部分を仮にこう呼

ぶ) とが交互に現われる形をとっているが、行の構成のうえで両者はどのような関係に立っているか、すなわち折返し句は詩句の前について行を構成しているのか、後についているのか、あるいは詩句・折返し句がそれぞれ独立した一行をなしているとするべきかの問題は、実際には詩の旋律ともかかわっており、本資料だけでは必ずしも容易に決定できない。この点について従来の取扱いでは、一般に折返し句は詩句に前接するものとしてとらえられている場合が多いようであるが、特にその根拠は示されていない¹¹⁾。筆者は次の理由から、一般に折返し句はむしろ詩句の後についていると見なされるのではないかと考える。すなわち①詩の冒頭に折返し句を欠く例は少なくないが、末尾に欠く例はないこと、②〈17〉の詩では途中で折返し句が変わるがその変わり目が内容の切れ目に対応するためには折返し句が後についていると見なければならぬこと、および③〈1〉〈2〉の詩では折返し句の後がすべて句読点で区切られていること、などの事実はいずれも折返し句後接を示唆するものと言えよう。

しかしこれはすべての詩について一概に決定できない問題かもしれない。なお検討を要する。特に大半の詩は冒頭に折返し句をもっており、その場合は前接・後接いずれの立場に立っても冒頭または末尾に折返し句だけからなる一行を認めざるを得ず、そうなるとむしろ各折返し句が詩句と交互に独立で一行を構成しているとする見方もあながち否定できない。その点で本稿での行の扱いはなお暫定的な措置と言わざるを得ない¹²⁾。

2.2 各詩の行数は短いものでは4行から、長いものでは63行におよび、かなりの開きがある。

一行内の詩句の語数は1語から4語まで見られるが、基本的には2語からなると見ることができよう¹³⁾。これは大部分の詩の折返し句が2語からなることと一致する。

一般に各行の詩句は4音節以上8音節以下からなっていると見られるが、3音節あるいは9音節と見られる例もある¹⁴⁾。一行をなす詩句の音

節数は同一詩内でもかなりの開きが認められ、詩ごとに各行の音節数がそろっているとは一般に認めがたい。これは各行が仮に一定の旋律で歌われたとしても、音節を引きのばしたりあるいは早く発音したりして長さを合わせることが比較的容易に行なわれたためであろうと考えられる¹⁵⁾。ただし互いに平行的関係に立つ各行では音節数の一致が認められる場合がある（後述 5.1 参照）。また詩句の音節数と折返し句の音節数との間にもめだった相関性は認められないが、折返し句が 2 音節の場合を除けば、多くの場合両者の音節数にさほど大きな差はないと言えるかもしれない。

3. 節

行は単独で完結した内容を表わすこともあるが、一般にはいくつかの行が集まって形式上・意味上のまとまりを形成する。そのまとまりを仮に節と呼ぶ。節は一般に 2 行ないし 3 行からなるが、5 行あるいはそれ以上と見られる場合もある。また詩によっては節の区切りが必ずしも明瞭でない個所もある。

一篇の詩の全体が等しい数の行からなる節に等分される例は少ない。このことは、節のようなまとまりではなく各行がひとつの旋律に対応していることを示すものであるかもしれない。ただし平行的表現をなす節が繰返される場合は各節の行数は等しいのが普通である（後述 5.2 参照）。

4. 頭 韻

折返し句と並んで本資料の詩の重要な韻律的特徴をなすのが、頭韻（alliteration）の存在である。実際にはその現われる程度は詩によってかなり異なり、一篇の全体を通して見られる場合から、ほとんど観察されないものまでであるが、多くの詩については随所に何らかの形での頭韻が観察される。

頭韻はその現われる位置によって二種に大別できる。すなわち同一行内の2語が韻をふむもの、および異なる行の頭が韻をふむもの、である。それぞれを仮に行内の頭韻、および行間の頭韻と呼ぶ。

4. 1 行内の頭韻は詩句の最初の語と二番目ないし三番目の語の頭に観察される。一般に散発的に現われる例が多い（以下詩の引用に際しては折返し句は省略し、行の切れ目を／で示す）：

ama i age <1> 1. *ya age yalure* <1> 14.
age absi buceheni <4> 21. *hungken de hujufi* <8> 8.
gūsime gūnici <13> 17. *gele gete* <16> 62.

2行からなる節の平行的な各行に連続して見られる場合もある：

hutu de hosungge / ibagan de icingga <8> 15・16.
abdaha da arsuha / fulehe de fusuhe <16> 10・11.
ilan saman ilgaci / dwin saman dekeneci <16> 16・17.
eiten erun iletu / gemu getuken sabuha <17> 38・39.

4. 2 これに対して行間の頭韻は、2行からなる節の頭に典型的に現われ、しかも一般に押韻された節がある程度連続する場合が多い。その例は各詩の随所に見られるが、連続が全体的に顕著な詩の例としてはたとえば<7><9><11><13><15>などがあげられよう。特に<15>では冒頭の折返し句のみの行を除けば全行が、2行の節を単位として押韻されている。

なお節の境目をはさむ2行が同韻をもつと見られる場合もまれにあるが、これはむしろ偶然と見なすべきかもしれない¹⁶⁾（以下節の切れ目と重なる行の切れ目を特に//で示す）：

erehe bihe // erdemu bisire <4> 12・13.
haha si donji // han be tuwabume <5> 4・5.

また押韻が3行に渡る例が散発的に見られるが、この場合も1節をなすものと、異なる2節にまたがるものがある。後者はやはり偶発的なものかもしれない：

eme i sure age / eme mini / enen juse <2> 1-3.

dogün dobure/doholo age/donjime gaisu <9> 2-4.

alin be dabame/amcame genefi/algin be gaihade <16> 31-33.

uyunju se jalgan/ulgun be tolome/uyun juse ujikini <17>

21-23.

holo seci/holo sebai // holo saman holtombi <5> 10-12.

goro mafa boode/goirame genembi // goro mama bade <9>

21-23.

eršeme kundulembi // erebe gūnici/ergen be guwebureo <13>

25-27.

amba gurun de/algin tucike//ayan hiyan be <16> 27-29.

さらにまた連続する4行が同韻をもつ例もあるが、これは2行ずつからなる2節に分けることができる：

bai buci/baniha bumbi // banjire aldasi/balai gajiha <11>

12-15.

adame gargan de/alaha daimin // alin be šurdere/aisin inggalii <16> 46-49.

行間の頭韻は上述のように連続する行に見出されるのみならず、3行以上からなる節では行をへだてて観察される場合もある。次の例ではかかる頭韻がいくつかの平行的な節中のそれぞれほぼ等価な位置に現われていることが注意される：

sure banjia/...../sungken aha bi/..... // mergen age be/...../...../mentuhun aha bi/..... // erdemu bisire/...../...../ehelinggo aha bi/..... // fengšen bisire/...../ferguwehe bihe <4> 4-20.

dergi alin de/...../dekdere gasha ///..... // mangkan alin de/...../mangmoo manggisa <12> 2-9.

なおまた次の例では、行の二番目の語と次行の頭が韻をふんでいるように思われる：

wehei ukdun/ukcame jidereo <6> 2・3.

suseri hoošan be/hosifi belhe (7) 24・25.

goro mama bade/maksime yumbi <9> 23・24.

hatan arki/alibume bumbi <9> 38・39.

geren wecense/wehiyeme dooburo <10> 13・14.

このうち特に <9> の詩では上例中の 2 箇所を除いた全行が通常の行間の頭韻を有しているところから見て、かかる変則的な押韻法が臨時的な手段として用いられたものかもしれない。また上例の多くは、結局折返し句をはさんで隣合う 2 語間に見られるわけであり、かかる 2 語間に韻律的な結びつきが意識されたとしてもさほど不自然ではなかろう。このことは上と逆の例、すなわちある行の頭と次行の二番目の語が同韻であるような例がほとんど見出されないことによっても裏づけられよう。

4. 3 行内の頭韻と行間の頭韻はしばしば並行して現われることがある。すでにあげた例の中にもいくつか見られるが、それ以外のものとしてたとえば次のようなものがある：

ahasi de gosingga/ambulingga age <2> 19・20.

asigan be amcame/antahašame banjiki <15> 14・15.

da gargan de/dalaha daimin <16> 44・45.

4. 4 上に見てきたいいくつかの例からも知られるように、押韻の単位は一般に (C)V として現わすことができる (Cは子音音素、Vは母音音素、() の部分はないこともある)。これは必ずしも音節とは一致しない。ただし次のように (C)V を越えた、音節の単位で韻をふんできると見られる例もある：

wehei ukdun/ukcame jidereo <6> 2・3.

mangkan alin de/...../mangmoo manggisa <12> 7・9.

meiren i hūsun de/meihereme gajireo <12> 39・40.

aifini bucefi/aikime niyaha <13> 11・12.

また次のものは一方が 1 音節を越えた単位で対応していると言うことができるかもしれない：

dalbade iliha/dalaha jari <7> 2・3.

yarume gamareo / yargiyan fede <7> 35・36.

erin unde / ergeleme gajiha <11> 8・9.

amasi buci / ambula baniha <11> 10・11.

ilan saman ilgaci <16> 16.

さらに特殊な場合として、同一語ないし同根の語が反復されることもある：

eme i sure age / eme mini <2> 1・2.

waka seci / waka sebai // holo seci / holo sebai <5> 8—11.

inu seci inu se / waka seci waka se <5> 51・52.

wašiha ci / wašihalame gajireo // šoforo ci / šoforome gajireo
<12> 31-34.

これに関連して次の例は、偶然にすぎないかもしれないが、2語にまたがる同じ音の連続が異なる分節と意味を伴って反復されている：

uyunju se jalgan / / uyun juse ujikini <17> 21・23.

4. 5 押韻される際、前後の (C)V が完全に同等ではなく、類似音によっている場合もある：

šurdeme iliha / sure jari <7> 8・9.

sakda eme be / šar seme gūnifi <13> 28・29.

haha akū de / kangtaršame banjiki <15> 4・5.

hūdun doobuci / hoošan bumbi <9> 31・32.

holtome gamarakū / hūda werimbi <11> 20・21.

hutū de hosungge <8> 15.

mukden be šurdere / menggun inggali <12> 19・20.

duin saman dekeneci <16> 17.

さらに現われ方が散発的なため確実さは劣るが、次のようなものもあるいは同韻として認められるかもしれない：

duka tuwakiyara <3> 2.

duka tulergide <3> 6.

tanggū dalhan <7> 20.

cakūra moo falga / jakūn juru manggi <16> 56・57.

kumuru hutu <5> 22.

hafirame gajiha <17> 11.

sure banjiha / seme donjiha <4> 4・5.

bucehe beyede <17> 12.

geren gurunde <8> 19.

giranggi yali / gemu hungkenehe <13> 13・14.

これらをまとめると、子音については s-š, k-h (あるいはさらに t-d, c-j), 母音については u-e, (h のあとの) ū-o などが同韻として用いられていると言えよう¹⁷⁾。

4. 6 なお本資料の詩では、一般に脚韻は同一語ないし同一語尾の反復を除けば特に認められない。ただし次のような個所では、末尾の音節構造の似た語を並べることによって、脚韻的效果をあげていると言えるかもしれない：

giru muru <2> 21.

nisihai birai <16> 23.

ayan hiyan be <16> 29.

šar seme gūnifi / hor seme dulembureo <13> 29・30.

sure banjiha / seme donjiha <4> 4・5.

eigen haji / ekšeme donji // haha haji / hahilame donji <13> 1-4.

fainggo be farganambi // / buhime genembi // / ergen be ganambi <7> 27-31.

5. 平 行 的 表 現

詩の表現の一般的特徴として、同一ないしは類似した意味内容を異なる表現で反復することがしばしばある。この場合各表現間に形式上の平行性 (parallelism) が観察されることが多い。本資料においてもかかる平行的表現は随所に見られる。これは行と行の間に見られる場合と、節と節の間に見られる場合とに大別される。

5. 1 まず行と行の間の平行的表現として次のような例がある：

mergen gebu mukdehebi / amba gebu tucikebi <5> 39・40.

weijubure de mangga / aitubure de jobombi <5> 49・50.

inu seci inu se / waka seci waka se <5> 51・52.

hutu de hosungge / ibagan de icingga <8> 15・16.

abdaha de arsuha / fulehe de fusuhe <16> 10・11.

weijubume jiki / aitubume gaiki <16> 60・61.

いずれも1節をなす2行が、それぞれほぼ同じ内容を表現している。一般に3行以上にわたる例はないようである。同じ語尾が同じ位置に反復されるのみならず、前後の行の音節数もほとんど等しいことが注意されよう。また行内の頭韻が散見する一方、行間の頭韻が全く見られないことが注意される。これは、行間の頭韻が一般に各行の連続的な結びつきを強調する働きをもっている（本稿注16参照）のに対し、行間の平行的表現はむしろ各行の非連続な、並列的ないし対立的関係のうえに成立しているということを考えれば納得できよう。上例中に頭韻とはむしろ逆に、wei-/ai-のような対比的な音の並置が見えるのも、かかる対立的関係の現われとすることができる。

5. 2 節を単位とする平行的表現はより広範に観察される。これについては各詩の中に容易に見出されるので、ここでは特に顕著な個所を指摘しておくにとどめる。節の間の平行的表現は一般に2行からなる各節に典型的に見られ、その連続は2節の場合から5節以上におよぶ場合もある。その際それぞれの節は行間の頭韻をもつことも多い。たとえば<7> 2—9の4節、<9> 17—28の6節、<15> 2—15の7節などは2行からなる各節がほぼ等しい内容と形式の繰返しからなり、しかも各節がほとんど押韻されている顕著な例と言えよう。

3行あるいはそれ以上の長さからなる節が平行的に繰返されることもある。ただしその際は押韻もさほど顕著ではなくなり、またときには各節の行数も不揃いなことがあり、形式上の平行性も減じる。3行からなる節による平行的表現の例として<1> 15—23の3節、<7> 14—25の

4 節, 同じく <7> 38—43 の 2 節などがある。また <4> 4—20 は 3—5 行からなる 4 節が類似内容を反復しているが, 形式上の平行性はかなりくずれている。

5. 3 かかる平行的表現においては, 数量に関する漸層法 (gradation) がしばしば見られる:

ilan saman ilgaci / duin saman dekeneci <16> 16・17.

jakūn da jabjan / uyun da meihe <16> 54・55.

oforo šurdeme / orin damjin / muke makta // dere šurdeme / dehi hunio / muke hungkure <7> 38—43.

cakūra moo falga / jakūn juru manggi // mang moo falga / juwan juru manggi <16> 56—59.

すなわち何らかの数量表現が平行的に現われる場合には, あとのものがより大きな数で現われて表現を高めている¹⁸⁾。ただしまれには次のように, 同じ数が繰返されたり, あるいはむしろ減少した数が現われている箇所もある:

tanggū dalhan / fe misun be / dalbade sinda // tanggū sefere / suseri hoošan be / hosifi belhe <7> 20—25.

uyun da meihe / jakūn da jabjan <12> 10・11.

5. 4 平行的表現にあってはまた, 対比的ないし対立的な意味をもつ 2 語が対置されることがある。たとえば次の例では《金》・《銀》の対比が明瞭である:

alin be šurdere / aisin inggali // mukden be šurdere / menggun inggali <12> 17—20.

aisin hiyanglu de / alamime tebufi gaju // menggun hiyanglu de / ungkufi gaju <12> 35—38.

また次の例では《薄い》・《厚い》の語が対立的に置かれている:

nekeliyen šan be / neifi donji // giramin šan be / gidafi donji <7> 10—13.

5. 5 なお上の表現 (<7> 10—13) はほぼ同じ形で <9> 5—8,

〈13〉5—8にも見出される。一般に詩が特定の相手に訴える内容のものである場合には冒頭に聞き手への呼びかけがなされることが多いが、上の表現はいずれもその呼びかけに伴って現われている。このように平行的表现のうちには、いわば常套的表现としていくつかの詩にはほぼ同じ形で多用されるものがある。これらはおおむね周到に押韻され、平行性も顕著で、口調の良いものが多い。他の例として、シャーマンが死者の魂を求めて死の国へ旅立つことははじめに次のような表現で示される：

farhūn bade / fainggo be farganambi // bucehe gurun de / buhime genembi // ehe bade / ergen be ganambi // tuheke fainggo be / tungiyeme yombi 〈7〉26—33.

同様の表現は、多少の違いは見せながらも、〈8〉9—14、〈9〉40—43、〈16〉38—41にも繰返し用いられている。

6. 比喩・反語法

6.1 比喩は本資料の詩ではさほど顕著ではないが、直喩と隠喩の例が若干見出される。

直喩として次のようなものがある。

fiyan banin / pan an i gese / saikan age 〈2〉23・25.

giyahūn adali / eme jilgan be / donjime baire 〈2〉28・30.

前者は Sergudai の美貌をたとえたもの。後者はおそらく、母が Sergudai の声を聞き求めるさまを鷹が主人を探すことにたとえたものと思われる。

隠喩の例はたとえば、シャーマンが旅立った死の国 (bucehe gurun) のことを farhūn ba 《暗国の地》(〈7〉26他)、ehe ba 《悪い所》(〈7〉30他) などと言うところに見られるほか、次のような個所に見出される：

abdaha de arsuha / fulehe de fusuhe 〈16〉10・11.

boobai oho de / hafirame gajiha 〈17〉10・11.

前者は Baldu Bayan 家に子孫が誕生したことを草木が繁殖することにしたとえ¹⁹⁾、後者では大切な一人息子を無事連れ帰ったことを《宝物を脇の下にはさんで取って来た》と表現している。

6. 2 反語法としてはたとえば〈1〉9, 14, 17, 20, 23および〈2〉17・18, 35-37 などに見える we 《だれ》, ya 《どんな》等の疑問詞を伴った疑問表現が一人息子を失った父母の嘆きを強める効果をあげている。また〈14〉2・3では、老母以外何も残さなかった Nišan の夫が, aibe werihe 《何を残したか》という強い表現で非難されている。

7. 特異な語形・語順・表記法

最後に詩の中に見出される特異な語形・語順・表記法について若干ふれておきたい。

7. 1 文語と異なる、あるいは文語に見当らない特異な語形は、はじめに述べたように本資料の地の文を含めた全体に頻繁に見出されるが、ここでは詩に現われたもののうち、特に何らかの韻律的要因で通常の語形が改変されたと考えられる例を指摘しておく。

まず顕著な個所として次のような個所がある：

ainaha algin / weinehe welgin // halai hashūri / yala yashūri
 〈16〉5—8.

ここでは各行内の頭韻と、節ごとの各行の平行性が顕著であるが, weinehe, welgin, hashūri, yashūri の各語は通常の文語に見当たらない語形である。weinehe は we 《だれ》と前行の ainaha 《どんな》との一種の混淆によるもの、また welgin も前行の algin 《名声》を weinehe に頭韻をそろえて改変したものと思われる (D82—83, 159 ; S110参照)。hashūri, yashūri の2語については語義不明と言わざるを得ないが、やはりかかる改変のためにもとの語形との連関が失われたものかもしれない²⁰⁾。

また次の例においても頭韻をそろえるための語形改変が行なわれてい

と見られる：

hungken de hujufi <8> 8.

hungken の語は前後の文脈に照らして、D (139) の指摘するように文語 hengkin 《叩頭》にあたることが考えられ、これが hujufi に韻を合わせて改変されたものかもしれない。ちなみに頭韻の制約のない<17> 29, および地の文中(原資料 p. 10, 11) では動詞化された hengkile- が、文語と同じ形のまま現われている。

また次のような1節がある：

dalaha daimin / alaha daimin <12> 22・23.

この alaha は文語形 alha が dalaha にそろえて改変されたものと見られるかもしれない(D146による)。同様の例が<16> 44—47にも見出される。

7. 2 語順の特異な例はまれであるが、haji 《親密な》という語に関して次のような用法が見えるのが注意される：

age i haji / absi utu / jalgan foholon <4> 1—3.

eigen haji / ekšeme donji // haha haji / hahilame donji <13> 1—4.

haji という語は文語のhaji gucu 《親友》などという表現にも見られるように、通常の形容詞と同じく名詞の前に置かれるのが普通であり、上の例はそれぞれ haji age, haji eigen, haji haha の意と考えられる(S43参照)。ここでは行間の頭韻をそろえるためにかかる語順が用いられたものかもしれない(haha haji ではさらに1行目との平行性が考慮されたものか)。現に頭韻の制約のない個所では、haji eihen (eigen) として現われている例がある(<13> 16, <14> 1)。しかしながら韻律的要因で語順が改変されたような例は他に見当たらないところから、上例についてもあるいは haji という語の用法自体が両様の語順を許したものかもしれない問題である。

7. 3 特異な表記の例として、jihese <3> 10, gida nufi <16> 4 の2例があげられる。前者では通常離して書かれる2語(jihe se)が1

語のようにつづけて書かれ、後者は逆に1語と思われるもの(gidanufi)が離して書かれている (S 43, 110; D 128, 159 参照)。後者については、2語からなる前後の行にそろえたものかもしれない。いずれにせよこれらが単なる表記上の問題か、あるいは韻律上・形態上の切れ目の有無にかかわる問題かはここでは問わない。

お わ り に

本稿では Nišan saman i bithe における詩を資料として提示し、韻律的・修辭的観点からの分析を試みた。それにより、従来その存在すら見すごされてきた感のある満州語の詩の特質がある程度明らかにされたものと思われる。特に本稿では、まず詩の部分に対する従来の転写に見出されるいくつかの誤りをただし、資料としての正確さと有用性を高めた。また詩と地の文の区別にあたり、地の文中にも注目すべき韻文的性格が観察される場合があることを指摘した。また詩の重要な特徴をなす折返し句についてその位置は、これまでの多くの扱いとは異なり、むしろ詩句に後接（もしくは並行）していると見なし得ることを述べた。さらに頭韻をいくつかの型に分類し観察する中で、行をへだてた押韻や、行の二番目の語と次行の頭との押韻などの存在も明らかにされた。修辭的には全体を通じて平行的表現が豊富に確認された。

むろん満州語詩の全貌の解明のためには今後さらに広範な文献にあたって資料の探索が行なわれなければならない。翻訳ものや散文のジャンルに属すものの中に新たな韻文的資料が発見されることもあり得よう。また本稿中にも指摘したように本資料中の地の文についてさらに韻文的性格を検討することもさしあたり必要であろう。また本資料と類似した形式と内容をもつという点で、注1で指摘した資料の全般的な検討と分析も興味のもたれるところである。

また分析に先立って資料の厳密な吟味が不可欠であることは言うまでもないが、本資料全般についての従来の転写・翻訳の作業にはまだ不備

な点が多く、特異な語の解釈についても問題点が少なくない。その整備と解明も重要である。

今後また特に満州語の音節構造の解明に伴って、詩の分析もその点でさらにすすめられなければならない。逆に詩の韻律的分析が音節構造の解明に手がかりを与えることもあり得よう。

こうして資料の集積と分析がすすめば、隣接諸言語の詩との比較も可能となり、それによりさらに多くの事実が明らかになることが期待されるのである。

(1979年7月)

付記 本稿作成にあたって、そのテーマをお勧めくださったのみならず、終始貴重な示唆と有益な助言を惜しまれなかった池上二良先生に対し、心から感謝の意を表したい。

注

- 1) 三田村泰助「満州シャマニズムの祭神と祝詞」『石濱先生古稀記念東洋学論叢』1958、によれば、「祭祀全書巫人誦念全録」と題された資料中にシャーマンの祝詞の満州語原文二十数篇が収められているという。同論文ではそのうち数篇が紹介されているが、折返し句のない点を除けば本稿での詩と類似した形式と内容をもち注目される。
- 2) Волкова, М. П. *Нишань самани битхэ: предание о нишанской шаманке*, Москва, 1961 (以下Vと略称)。テキスト影印とロシア字転写, ロシア語訳。ただしその転写は原満州字に必ずしも忠実でなく、特異語の多くを自身の解釈で文語形に直している。
- 3) V (p. 10) はウラジオストク本の一頁あたりの行数を「12行」としているが誤りである。また本の大きさについても「 $21.8 \times 7 \text{ cm}$ 」とあるが、影印のたて・よこの比率からみて、おそらく $21.8 \times 17 \text{ cm}$ の誤りかと思われる。これらの誤りはそのままS (本稿注4参照: p. 4), C (同: p. v) にも踏襲されている。なおVの書誌的記述はアイグン手稿本についても疑問である。すなわち本の大きさ、丁数、一頁あたりの行数に関してV (p. 8) の記述は、同じ手稿本 (рукопись А 124 Института народов Азии АН СССР) についての他の著書 (Волкова, М. П. *Описание маньчжурских рукописей Института народов Азии АН СССР*, Москва, 1965, p. 94) での記述と全く一致しない。ちなみに、1969年 Институт народов Азии でアイグン手稿本 (A 124) を実際に閲覧された池上二良先生によれば、その第一巻 (“emu debtelin”) は各頁12行、表紙・裏表紙とも含めて18丁、第二巻

(“jai debtelin”) は各頁11行、全11丁であり、それぞれの表紙には満州字で“yasen sama i bithe” (第一巻)、および“nits'an sama i bithe” (第二巻)とあるとのことである。貴重な情報の発表を快諾された同先生の御厚意に感謝する。

- 4) Волкова 自身の転写・ロシア語訳のほかには次の4種がある ([] 内は本稿での略称)。

成百仁 (Seong Baeg-in)「満州 *syā-man* 神歌 : *Nišan saman i bithe*」, Seoul, 1974 [S]。テキストのローマ字転写と朝鮮語訳。特異な語形に対して詳細な注で、対応する文語形を指摘すると共に、「語学的特性」の章でテキストの満州語の特徴を音韻面・形態面にわたって考察している。

莊吉發 (Chuang Chi-fa)「尼山薩蛮傳 : *Nišan saman i bithe*」, 台北, 1977 [C]。ローマ字転写とシナ語訳。特異な語形等に対する配慮は少なく、その解釈の多くはSによったところがあると見られる。

Nowak, Margaret & Stephen Durrant. *The tale of the Nišan shamaness : a Manchu folk epic*, Seattle, 1977 [D]。ローマ字転写と英語訳に加えて、内容の文化人類学的解釈がなされている。転写と訳においてはV, Sの作業をふまえてさらに綿密な注解を加え、新たな見解を示したところが少なくない。

Stary, Giovanni. *Viaggio nell' Oltretomba di una sciamana mancese*, Florence, 1977。イタリア語訳。未見。

なおまたVのロシア語訳をさらにドイツ語へ抄訳したものとして次のものがある : Seuberlich, Wolfgang. “Die mandschurische Sage von der Nišan-Schamanin”, *Fernöstliche Kultur : Wolf Haenisch zugeeignet von seinem Marburger Studienkreis*, hrsg. u. bearb. von Helga Wortmit, Marburg, 1975, pp. 197-240。

- 5) Sinor, Denis. “Some remarks on Manchu poetry”, *Studies in South, East, and Central Asia : presented as a memorial volume to the late Professor Raghu Vira by members of the PIAC*, New Delhi, 1968, pp. 105-114。この論文では他に蒙古語およびシナ語から満州語に翻訳された詩が紹介され、その韻律的分析がなされている。
- 6) いずれにせよ改行される場合はすべて最初の折返し句から改行されている。したがって折返し句で始まる詩の場合は詩の開始と改行が一致するが、冒頭に折返し句をもたない詩では一致しないことになる。〈11〉の詩では開始直前の地の文に, hocohon jilgan i [改行] *hoge yage hūlame* [詩の開始] 《良い声で hoge yage と叫んで》とあり、冒頭の折返し句がいわば地の文に組込まれた形になっていて、その組込まれた折返し句から改行がなされている。
- 7) 〈7〉の詩が△印を欠くのは、その直前にきわめて短い〈6〉の詩が存在するためかと思われる (なお〈6〉の詩の注参照)。また〈17〉では同一詩の途中でいったん折返し句が変わるが、その変わった直後の行の頭にも△印がある。
- 8) 後半 *amba* 以下の頭韻についてはS62にも指摘がある。なお引用文中に見える“dekennime. haihūngga”の部分 Sinor (p. 113) は“deken-i haihū-

- ngga”として、〈6〉〈7〉の詩に対する「メロディーまたは韻律的構造の名称」であるとして注目しているが、これはVの転写と解釈の誤りを踏襲した結果であり、この部分の韻律的構造を見逃した解釈と言わざるを得ない。
- 9) hobage, deyangku は折返し句としてそれぞれ〈9〉〈3〉などに見える。なお deginjime の語をS・Cは dahinjime, Dは dajinjime と転写するが、初音節は明らかに de- であり、den, deyangku と韻をふむ。
 - 10) Köhalmi, Käthe. “Zur Problematik der mandschu-tungusischen Volksdichtung”, *Altaica Collecta*, Wiesbaden, 1976, p. 166 にも, “Auch die Hilfsgeister der Schamanen haben eigenen Tonkehrreime bei ihrer Anrufung” という指摘がある。
 - 11) Sinor (pp. 112-114) は本資料〈15〉〈5〉〈6〉〈7〉の詩(〈6〉を除いては一部分)をとりあげているが、やはりいづれも折返し句は詩句の前について行を構成し、折返し句と詩句との間に韻律上の休止(caesura)があるとしている。
 - 12) ちなみにポッペによれば「ホリ・ブリヤート叙事詩」では折返し句が「物語の一行置きに」見られるという：ポッペ, N., 播磨櫓吉訳「ハルハ蒙古の英雄叙事詩」『蒙古』8-3・4, 1941, p. 161。またアイヌ語の神謡では折返し句は「各句の冒頭に繰り返されるもの」が「最も多く、それが本来の形式であった」とされる：知里真志保「アイヌの神謡」『北方文化研究報告』9, 1954, p. 14。
 - 13) その際 i, be, de 等をはじめとする明らかな付属的要素は、離して書かれていても一語とは認めないものとする。
 - 14) ただし満州語の音節については十分明らかな点もあり、音節数を特定しがたい場合が少なくない。また特に音節の長短・強弱等について文語資料からうかがうことは困難であり、詩の分析もこの点で制約されざるを得ない。
 - 15) 同様のことはオロコ語の歌謡においても行なわれている。ただしそこでは各行の音節数に本資料ほど大きな差は認められない：池上二良・谷本一之「オロコ族の歌謡」『北方文化研究』8, 1974, ch. 1 参照。
 - 16) 2節にまたがる頭韻がまれにしか見出されないという事実は、結局頭韻の本質が単なる口調の良さにあるのではなく、同韻の各要素の連続性・結合性を確認し強調するところにあるということを示していると考えられる。
 - 17) ちなみにハルハ蒙古語の韻文においても s-š, x-g, t-d, および ô-û, e-i などが同韻として用いられる：ポッペ, pp. 147-148 参照。
 - 18) ポッペ pp. 151-152 ではハルハ蒙古語の韻文におけるかかる漸層法の例が指摘されている。
 - 19) 同様の比喩的表現が「祭祀全書巫人誦念全録」中にも見出される：abdaha de arsumbu, fulehe geli fusembu. 《葉に芽を出させ根また茂れよ》。三田村 p. 538 参照。
 - 20) D (p. 83, 159) はこの2語を“special clan terms”かとしている。hashūri については「祭祀全書巫人誦念全録」中に次のような意味不明の語が見えるのが注意される：hasuri hala tere hala. 《? 姓はそれがしの姓》。三田村 p. 537 参照。